

広島県感染症発生動向月報

[広島県感染症予防研究調査会]
(平成17年11月解析分)

1 疾患別定点情報

定点把握(週報)五類感染症

平成17年10月分(平成17年10月3日~10月30日:4週間分)

疾患No	疾患名	月間発生数	定点当り	過去5年平均	発生記号	疾患No	疾患名	月間発生数	定点当り	過去5年平均	発生記号
1	インフルエンザ	15	0.03	0.00		12	ヘルパンギーナ	48	0.16	0.15	↓
2	RSウイルス感染症	26	0.09		↗	13	麻疹	1	0.00	0.01	
3	咽頭結膜熱	94	0.31	0.17	↓	14	流行性耳下腺炎	645	2.15	0.65	⇨
4	A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	157	0.52	0.71	⇨	15	急性出血性結膜炎	0	0.00	0.01	
5	感染性胃腸炎	961	3.20	3.30	⇩	16	流行性角結膜炎	106	1.33	1.18	↘
6	水痘	173	0.58	0.77	⇩	17	細菌性髄膜炎	1	0.01	0.00	
7	手足口病	41	0.14	0.51	↓	18	無菌性髄膜炎	10	0.12	0.10	⇩
8	伝染性紅斑	29	0.10	0.10	⇨	19	マイコプラズマ肺炎	25	0.30	0.21	⇨
9	突発性発しん	168	0.56	0.76	↘	20	クラミジア肺炎	0	0.00	0.00	
10	百日咳	4	0.01	0.02		21	成人麻疹	0	0.00	0.00	
11	風しん	1	0.00	0.02		「過去5年平均」:過去5年間の同時期平均(定点当り)					

急増減	増減	微増減	横ばい
↑	↗	⇨	⇨
↓	↘	⇩	
前月と比較しておおむね1:2以上の増減	前月と比較しておおむね1:1.5~2の増減	前月と比較しておおむね1:1.1~1.5の増減	殆ど増減なし(発生件数少数のものを含む)

定点について

定点情報は、定点把握対象の五類感染症(週報対象21疾患,月報対象7疾患)について、県内188の定点医療機関からの報告を集計して作成しています。

	内科定点	小児科定点	眼科定点	STD 定点	基幹定点	合計
対象疾患 No.	1	1~14	15, 16	22~25	17~21, 26~28	
定点数	45	75	20	27	21	188

疾患No	疾患名	月間発生数	定点当り	過去5年平均	発生記号	疾患No	疾患名	月間発生数	定点当り	過去5年平均	発生記号
22	性器クラミジア感染症	49	1.81	2.55	↙	26	メチシリン耐性黄色ブドウ球菌感染症	104	4.95	5.11	↗
23	性器ヘルペスウイルス感染症	15	0.56	0.66	↘	27	ペニシリン耐性肺炎球菌感染症	37	1.76	1.72	↗
24	尖圭コンジローマ	11	0.41	0.47	↗	28	薬剤耐性緑膿菌感染症	7	0.33	0.56	
25	淋菌感染症	12	0.44	1.10	↘	「過去5年平均」：過去5年間の同時期平均（定点当り）					

咽頭結膜熱 急減（9月263件 10月94件）
 手足口病 急減（9月195件 10月41件）
 ヘルパンギーナ 急減（9月232件 10月48件）

2 一類・二類・三類・四類感染症及び全数把握五類感染症発生状況

一類感染症 発生なし
 二類感染症 発生なし
 三類感染症 11件発生【腸管出血性大腸菌感染症 { O157 3件（広島地域保健所管内1件，広島市保健所管内2件） O26 8件（広島地域保健所管内2件，福山市保健所管内6件） }】
 四類感染症 2件発生【レジオネラ症 1件（福山地域保健所管内） 日本紅斑熱 1件（尾三地域保健所管内）】
 全数把握五類感染症 3件発生【ウイルス性肝炎 2件（備北地域保健所管内1件，福山市保健所1件） 破傷風 1件（広島地域保健所管内）】

3 一般情報

例年，これからの，時季に流行が多く見られる感染症にRSウイルス感染症と感染性胃腸炎があります

RSウイルス感染症

乳児期での発生が多い，急性呼吸器感染症で，主な症状は細気管支炎や肺炎です。
 年齢を問わず，感染を繰返し引き起こしますが，成人などでは鼻かぜ程度の軽い症状ですむ場合が多い感染症です。

病原体：RSウイルス（Respiratory Syncytial Virusの略）

潜伏期間：3～5日で平均4日です。

症状：発熱，鼻汁，咳などの症状が2～3日続く。1歳未満，特に6ヶ月未満の乳児，心肺に基礎疾患がある小児などでは，呼吸困難などの重篤となる場合があります。
 再感染の幼児の場合は，発熱や鼻汁などの上気道炎が主な症状です。

予防方法：鼻汁や喀痰などが，手指や器物などを介する接触感染や，飛沫によりウイルスが眼，のど，鼻の粘膜に付着して感染します。手洗い等を十分行う。予防のためのワクチンは実用化されていません。
 第44週（10月31日～11月6日）から急激に定点医療機関からの報告があり今後も増加する傾向にあります。

感染性胃腸炎

例年，11月ごろから増加が見られ，冬場にピークに達し，夏場は減少します。これからの時季に増加の傾向が見られます。

病原体：夏場は食中毒の原因菌でもある，カンピロバクター，サルモネラ，病原性大腸菌，菌腸炎ビブリオ等や，冬場になるとロタウイルスやノロウイルスなどのウイルスが多く検出されます。

症状：病原体によっても異なりますが，発熱，下痢（水様便，血便），腹痛，悪心，嘔吐などです。下痢症状が遅れて出る場合や，発熱を伴わない場合もあります。
 検査所見では，病原体により異なりますが，白血球数，赤沈，CRPの増加が見られ，特にサルモネラによるものでは，その増加が顕著です。

確定診断：症状，所見と経過，検査所見，患者背景を参考に臨床診断を行い，可能な範囲で病原診断を行います。
 患者背景は診断面，治療面からみて重要であり，次の点について確認します。原因と考えられる食品，水 家族や同一集団での同症状の患者状況 ペット等との接触 下痢発症前の抗菌薬 投与 生活歴 易感染要因 血便，水様便，白色便，緑色便等の便の状態 確定診断は，糞便や血液培養からの菌検出，糞便中の抗原検査（腸管出血性大腸菌のO157抗原またはベロ毒素，ロタウイルス抗原，腸管アデノウイルス）により確定します。

鑑別診断：虚血性大腸炎，炎症性腸疾患，大腸憩室炎，虫垂炎などとの鑑別が必要です。

治療法：起原菌が不明の場合，初期治療は，対症療法を優先し，症状の重症度や患者背景から抗菌薬の適応を判断する必要があります。

予後：一般的には良好ですが，O157の様に時には重篤になる場合があります。

感染予防：手洗いの励行が基本です。

麻しん(はしか)、風しんの予防接種の変更について

麻しん(はしか)及び風しん対策の一層の強化を図るため、予防接種法が改正され、平成18年4月1日から、麻しん及び風しんの予防制度が変更されます。

【変更内容】

乾燥弱毒生麻しん風しんワクチン(MR混合ワクチン)を使用することで、麻しん風しんの予防接種が一度で済むようになります。

より高い予防効果を得るために2回接種となります。

より大きな集団生活(小学校)を始める前に接種することが望ましいため、小学校就学前(いわゆる幼稚園、保育園の年長児)の一年間に2回目の接種を行なうこととなりました。

	現行(平成18年3月31日まで)	変更後(平成18年4月1日から)
接種対象者	生後12月から90月に至るまでの間にあるもの	生後12月から生後24月に至るまでの間にあるもの 5歳以上7歳未満の者であって、小学校就学の始期に達する日の1年前の日から当該始期に達する日の前日までの間にあるもの
ワクチン	麻しんワクチン 風しんワクチン	乾燥弱毒生麻しん風しんワクチン

【留意点】

麻しんや風しんは乳児期早期にかかってしまうことが多いため、麻しんと風しん予防接種は、母親からの免疫がなくなる生後12月以降なるべく早期に接種しましょう。

現在、麻しんと風しんの予防接種の対象者(生後12月から生後90月にいたるまでの間にある者)であって、未だ麻しんと風しんの予防接種を受けていないお子さまがいる保護者の方は、かかりつけ医とよく相談して、早期に接種を受けることをお勧めします。

ただし、平成18年3月1日～3月31日に、麻しんワクチン及び風しんワクチンともに未接種であって、4月1日以降に第1期及び第2期の対象となる子どもについては、4月1日以降に新制度で、乾燥弱毒生麻しん風しん混合ワクチン(MR混合ワクチン)の接種をされることをお勧めします。

平成18年4月1日以降、定期の予防接種としては乾燥弱毒生麻しん風しん混合ワクチンのみとなり、現在使用されている麻しんワクチンおよび風しんワクチンに関しては定期の予防接種(予防接種法に位置づけられている接種)では使用されないようになります。かかりつけ医と御相談のうえ、保護者の希望により接種を受けることは可能です。

詳細については、お住まいの市町にお尋ねください。

インフルエンザの予防接種を受けましょう

例年、11月下旬から12月上旬頃にインフルエンザの流行が始まり、1月下旬から2月上旬をピークに減少していきます。

インフルエンザは人口の約1割の人が感染するといわれており、特に、高齢者や幼児は重症化しやすいといわれています。

予防接種は、予防接種を受けてから免疫力が上昇するまで2週間程度かかります。予防接種の効果は5ヶ月程度持続しますので、早めに受けて流行に備えましょう。

各医療機関では、インフルエンザの予防接種が実施されております。事前に電話等で予約等を行い受診してください。

流行期に外出する場合はなるべく人ごみを避け、マスクをし、帰宅後は手洗いやうがいを励行してください。さらに、食事は栄養バランスに気をつけ、体力の低下を避けるため十分な睡眠をとり、部屋は乾燥させずにある程度の湿度を保つことがインフルエンザの感染を少しでも防ぐよい方法です。